

小学校教師による小5社会科“森林資源”の教材研究—1枚の写真を通して

## 街路樹の働きを考えよう

作成：鈴木 真（すずき まこと／東京都練馬区立中村西小学校 教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）\*

語り：「車道と歩道の上に木が植えられています。この木はケヤキです。ケヤキは、幹がまっすぐに伸び、枝が竹ぼうきを立てたように広がる姿の美しい木です。暑い夏には葉が茂り、涼しい木陰をつくれます。落葉樹なので、寒い冬には葉を落とし、暖かい日差しが地面に届きます。春の黄緑色のかわいい若葉、夏の深い緑色の葉、秋の茶色の紅葉、冬の美しい枝ぶりなどを想像できますか。このような四季を通じた変化は、目を楽しませ、心を和ませてくれます。小鳥が止まって休んでいる姿を見た人もいるかもしれませんね。

写真をよく見ると、下のほうにはツツジが植えられています。ツツジは排気ガスに強い木だといわれています。葉に触ってみると、指が真っ黒になり、排気ガスを防いでくれているのがわかります。またツツジは春から夏にかけて美しい花を咲かせ、道路に彩を添えてくれます。街路樹の働きには、騒音を和らげる、車道と歩道をはっきりと分ける、まぶしい車のライトを遮るといったことも挙げられます。

しかし、このような働きを持つ街路樹も良いことばかりではありません。たくさんの落ち葉が道路に積もり、スリップの原因になることがあります。

意図（鈴木）：都会の子どもたちにとって、街路樹は身近な樹木である。社会科第5学年「国土を支える森林資源の働き」の学習では、ぜひ身近な街路樹に目を向けて、その働きを実感させたい。また、街路樹も植えばなしではなく、山の森林と同様に、剪定などの世話が必要である。落ち葉が近くの家や雨樋を詰まらせたり、幹や枝が通行の妨げとなったりすることで、伐採を迫られている場合もある。身近な街路樹をどうするべきかを考えることは、地域社会において、主体的に、より良い環境づくりを考えることになる。その意味でも、都会において街路樹は格好の教材といえる。

寸評（山下）：都市部に住む子どもたちを対象とした教材の作成を依頼した。都市部の子どもたちにとって、「国土保全や水源かん養の森林」は、どこか遠い所にあるものといった感じで、自分たちの生活との結びつきを実感しにくい。それに比べ、校庭の樹木や街路樹は、かなり身近な存在といえる。そこで、こうした身近な樹木を、国土の森林へと関心を高めていくための窓口として位置づけ扱っていくことは、極めて意義があると考える。



▲ケヤキの街路樹  
（東京都練馬区：青梅街道 2003年11月撮影）

す。落ち葉が家の雨樋を詰まらせてしまうこともあります。幹が邪魔になって人や自転車の通行の妨げになることもあります。また、大きくなりすぎたり、台風などで枝が折れると危険だったりするので、剪定などの世話が必要です。このような世話は、だれがしているのでしょうか。

皆さんの学校のそばには、どんな街路樹がありますか。また、どんな街路樹にしたいですか。ぜひ、考えてみてください」

\*山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）